風と共に・・・行こう！！

かんた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風と共に・・・行こう！！

【Ｎコード】

Ｎ４７２８Ｔ

【作者名】

かんた

【あらすじ】

風俗店でのまいにちの生活

愛すべきヒトたちへ

これは、僕が、２００６年～２０１０年まで働いてた風俗店での、おもしろおかしくて、そしてちょっぴりせつなく哀しい記録史であります。

これを書くにあたって、僕は数名のヒトたちにアドバイスを求めました。「やっぱり、広く浅く、そしておもしろくするために、ホントと嘘を半々くらいに混ぜたほうがいいんですかね」と。

それに対し、二年以上もの間、僕の良き相棒で僕よりも有能でしかも右腕となってくれていたかとぅーんは、ちょいとニヤリとしながら、「半々とかじゃなくて、かなりリアルに書いたほうがいいですよ！なんだかここ最近、上っ面だけの、風俗店、風俗嬢物語みたいなのが出てるらしいですけど、
わかったようなこと言って、実際はわかっちゃあいないんですから！なので、ここは一つ、リアルに書いたほうがいいです！」と、Ｈ市駅前の居酒屋さんでそうオススメしてくれた。

五年間のうちの後半一年ほどを共にし、僕が店を辞めてからもちょいちょいお茶したり麻雀のお付き合いをしてくれてるティーチャーももこも、「それはやっぱり限りなく実話を書くべきでしょう」と、ニヒルにニヤニヤ笑ってくれた。

なので、これから書くモノは八割以上ホントのことだと思ってくれてもかまわないっす。　　パソコンの前に座って、さっき女の子の面接してそのあとに撮ってきたプリクラにボカシをかける作業をしていた。

風俗業界に入って三年半弱、店長になって一年半以上が過ぎていた。その頃にはさすがにもう、機械オンチの僕でも業務に必要な作業くらいはできるようになっていた。
ボカシの濃さを調節してると、そばにいたここんちの女の子ゆいが声をかけてきた。この部屋は、スタッフの作業場であり女の子たちの待機場所でもあるのだ。

「そのヒト、ワタシのセンパイかも」
ちなみにここは、T市にあるホテルヘルスの店・・またはイメクラともいわれる「J」という風俗店である。そして、高校時代の同級生、前バイトしてた所の同僚とか、知り合いや友達に偶然バッタリ出会うってパターンはけっして珍しくない。
過去の例では、高校時代の同級生だったときにはそれぞれあまり抵抗はない場合が多い。逆に喜ぶシーンが目立つほどだ。　一方、前いたキャバでいっしょだったなんてときは、えーっと眉をひそめるなんてケースがままある。

まぁそれはともかくとして・・
「へっ！？」　画面に目を向けたまま返事をする僕にゆいは、
「大学のいっこ上のセンパイ」
とりあえず僕は、すでに充分認識してたものの、このヒトの観察眼のスルドさに改めて感心した。　「プリクラで、しかもすでにボカシもかけてんのに、よく気付くねぇ」
一瞬、まぁねと得意気な表情を見せつつ、
「そんなことより、マズイじゃんそれ！」
やはりこの業界では、キホン周りのニンゲンにお仕事のことは内緒にしてるんである。ほとんどの子は、家族彼氏はもちろんのこと友達にだってだいたいのヒトに秘密にしてる。しかもゆいにあたっては、数ヶ月前に、そのことに関連した大事件が起こってるんである。

「でもなぁ、あの子はきっと大丈夫だと思うんだけどなぁ」　僕は少し弱気な態度でそう言った。
それは別に、ゆいのセンパイが危険人物だ！と疑っているからとかではなくて、こないだの大事件は僕の致命的なミスによって起こってしまったともいえるからだ。
この件はあまり触れたくないんだけど、いずれ書くことになると思う。
また、僕と同じくゆいもセンパイの人間性が怪しい！と言ってるのではなく、事件の後遺症で不安になっていたのだ。

「あえてこっちから話題をふるのもどうかと思うけど、ここは前もって口止めしといたほうがいいんでないかい」
僕の言葉に、ゆいは少し考えた後、
「うん、任せるよ」
と言った。

そして翌日、僕はゆいのセンパイふうかが出勤してきたときに、誰もいない待合室に呼び出した。お客さんが立て続けに来ない限りその部屋は人気がないので、ミーティング室や撮影場所も兼ねていたのだ。

ふうかをソファーに座らせ、目の前のガラステーブルの上に、十枚ほどの女の子のプロフィール付きプリクラを並べた。

「昨日あなたの面接のときに見本として出した写真、ほとんどそのときとメンツはいっしょなんだけど、この中で知ってる顔はないかい？」
来るなりいきなり呼び出されて、ナニゴトかとやや不審気な表情のセンパイふうかは、おんなじ顔つきのまま並べられた女の子たち

の写真をジーッと眺めた。
「いやー、誰も知らないよぉ」　　もちろん、並べた写真にはボカシはかかってない。受付用の写真なのだから・・。
ゆいの話では、学年がひとつ違いながらもいっしょに受ける授業もあり何度か言葉を交わしたコトもあるらしいが、やっぱり、コスプレ姿でしかもプリクラだとかなり印象が変わるんだろうか。

「えーとですね、もうこれ以上探ったりするのもめんどくさいんでズバリ言いますが、この子知ってますよね！」
僕はゆいの写真をつかんで、センパイふうかの前に差し出した。
少しの間、センパイふうかはぼんやり写真を眺めていたが、やがて、
「あーっ！知ってる、知ってる！！」
と、少しコーフン気味になった。
「あなたの後輩ですよね」
「そうそう、あたしのいっこ下！」

そこで僕は少しニヤリとした。センパイふうかもニヤニヤしだした。

「これは、いちいち念を押さなくてもわかっていただけると思いますが、ここんちでお仕事してることはお互いに学校の中ではナイショでお願いしますね」
「うんうん、そりゃもちろん」
幾分安心した僕は、それから素朴な感想をいくつか述べた。
「しかし、実物は、あなたと後輩は全然違う顔なんだけど、プリクラだとなんだか雰囲気が似てますな」
「ふぅーん、そうなんだ」
「あと、性格もかなり違うように感じますけど、すぐにニヤニヤするところはいっしょなのね」

「あっ、わかるわかる、あの子いつもニヤニヤしてるもん！」
と、ヒトのコトを言いながら、センパイふうかもずっとニヤニヤしてる。

「それからね、僕があなたをエライと思ったのは、白のフリをしない、ブラックさを隠してないところね」　まぁ、もちろん場合によってはぶらなくちゃいけないんだけども、そのヘンもお上手とみた。

すると、相変わらずニヤニヤしてるセンパイふうかは、
「そんなにブラックでもないよ」
「ん、そう？」
「ブラックに近いグレーだけど」
「・・あはははは」
「へっへっへ」

また一名、個性的なヒトが入ってきたのだった。

さて、ここで唐突に『現在』に戻る。
基本的には、働いていた五年の内の後半一年、つまり２０１０年の最初らへんからその年の１２月くらいまでのハナシがメインなんだけど、突然それよりも『過去』にさかのぼったりいきなり『現在』に来たりもいたしますので、ご注意くださいませ。

今ではもう、だいたいのヒトが引退してたり違う店に移ったりしてまして、まぁなんにしても登場人物には許可をいただかなくてはと思い、何人ものかたに連絡してみました。

すると、なんというコトだ！「いいよー」とか、「ま、プライベートなコトを特定されなければいいっす」とか、「はいはーい」または、「大丈夫でーす」・・など、すべてのヒトたちが、当時の名

前を出すコトも込みで快く承諾してくれたのだ。
僕はシビレた。感動で涙もちょちょ切れた、いや号泣した。　そして、星空を見上げ、「もしあたいが出世したあかつきには（するかわかんないけど）、この作品に出てくるすべてのヒトたちに大盤振る舞いするわ！」と固く誓ったのであった。

いつものように僕は、受付所の裏の作業場で、パソコンの前に座って作業してた。女の子が少ない夕方前の時間、そしてその子たちもみんなお仕事で出払っていたんで、そばでおなじくパソコン作業をしてるかとぅーんとたまたま二人きりであった。
そこで僕はかとぅーんに素朴な質問をぶつけてみた。　「あのですねぇ、ここんちで一番のルックスのヒトは誰だと思いますかね」
所詮この業界は人気商売である。ルックスやスタイルがいいだけでもダメなんだけど、やはりまずはそのヘンが重要視される。
そして僕は女の子たちに、そんな世界の理不尽さや、それでも必死こいてがんばらねばならんのだ！といった苦労、だけどもヒトはみんないっしょなんだよという、矛盾だらけのコトをすべて伝えていかなくてはイケないのだ。

作業の手を止め、かとぅーんはパソコンの画面から目を離し、僕の方を見て、
「それは、個人的な感想でしょうか、それとも一般的な意見でしょうか？」　「うーん、まぁ両方やね」
「そうですねぇ・・」
しばらくかとぅーんは考え込み、
「やっぱり、みみ氏じゃないですかね」
と答えた。

ほぼ予想通りの答えだったんで僕も、
「やっぱみみ氏かなぁ」
と言った。　すでに今まで何百人もの女の子の面接をしたが、初めて会ったときの、可愛い！または、このヒトは人気出る！といった衝撃度は、歴代で軽く五本指に入る。

「でもさ、みみ氏って不思議だよねぇ」
と僕はまだ素朴な疑問を発した。
「なにがですか」
「だってさぁ、みみ氏って、まぁ誰から見ても可愛いって思えるだろうけど、パーツ的に見たら、パッチリした目以外はむしろ欠点の方が多いんじゃない」
「あー、そうですねぇ確かに」
「でもさ、バランスとか雰囲気で、そういうのもプラスになって可愛らしく見えるんだよねぇ」
「あー、そうですねぇ確かに」

そんな会話を交わしてると、当のみみ氏が出勤してきた。
「ミャーミャー！」
「ミャーじゃなくて、おはようございますって言いなさいよ」
すると今度は裏声で、
「おはよー」
とフザケた声を出すんである。
「もうええわ・・かとぅーん！このヒトは中身も理解できませんよ、あたいには」
「あー、そうですねぇ確かに」
「ワルグチ言うな、ミャーミャー！」　そして、センパイふうかも登場する。夕方になり遅番のヒトたちが続々出勤してくるのだ。
「うーっす」
と言いながら入ってくるセンパイふうかに、　「オッサンじゃな

いんだからさ」
いちおう文句をつけるが・・馬の耳に念仏である。
「へっへっへ」
ニヤニヤするだけだ。

ふと僕は、みみ氏とセンパイふうかの顔を交互に眺め、思い付いたコトを言ってみた。

「みみ氏は似てる芸能人ってあんま思い浮かばないけど、ふうかセンパイはあのヒトに似てるね・・」
「・・誰？」
一瞬警戒するような表情になる。
「山口智子・・良くいえばね」
ニヤニヤ顔になったかと思いきや、また警戒の顔つきになった。
「じゃあ、悪く言ったら？」　「アンパンマン！」
「・・死ねっ！！」

すると、後輩ゆいもニヤニヤしながらやってきた。「おはようございまーす♪」

そして僕は、後輩ゆいの様子を見ながら、突然素晴らしいコトを思いつき、ひとり腹を抱え大爆笑してしまった。「ブッハッハ！」

「えーっ、なぁにー」「キモーい」それから、「ん、どした？」という後輩ゆいに、僕は気を取り直し、神妙な顔を作って、訴えた。
「今ワタクシは素敵な大発見をしました！」　イジョーに勘のスルドい後輩ゆいは、これはきっとロクなコトではない！と素早く察知したようであったが、それでも気になってしょうがないらしく、怪訝そうな表情を浮かべながらも、
「言ってみなさいよ！」

やや強めの口調で、目をギランとさせた。

「怒らない？」

「そんなの聞かなきゃわかんないでしょ！」　絶対怒られると確信したが、それでも言わずにはいられなかった。

「ゆいさん！あなたにヒジョーに似てるヒトを発見しましたっ！」

「誰っ！？」

「言っていい？」

「早く言えっての！」

「あのね・・おでんくん」

一時、ＮＨＫで放送されてた、リリー・フランキー作のアニメの主人公、たらこ唇のもちきんちゃくである。　一瞬の静寂のあと、あたりは爆笑の渦に巻き込まれた。

やった、やった！

しかし、たったひとりだけ、　「・・・」

無言。数分後、僕のからだは血の雨となったのであった（ホント）。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4728t/

風と共に・・・行こう！！

2011年10月9日00時30分発行